

## 民謡舞踊で 地域に尽力

畑中集落では今年5月に「畑中あつまろう会」というサロンが発足しました。会で民謡舞踊を教えているのが畑中集落到に住む清水かつみさんです。

着物姿が艶やかな清水さんは、熊本民謡会に所属する講師でもあります。「民謡の世界は奥が深いですね。『おてもやん』を深く学ぶに当たり、作者の永田稲さんのお墓にお参りにも行きました」と話します。

畑中集落で生まれ育った清水さんは結婚後、熊本市内で暮らしました。しかし熊本地震後、住み手がいなくなった実家が荒れ果てることを危惧し、理解ある夫の幸徳さんと古里に戻ってきました。

「地域の皆さんが『よう帰ってき



「おてもやん」の振り付けのポーズでパチリ。清水さんは気さくに応えてくれました。

たね』と温かく迎えてくださいました。そんな古里に恩返しがしたいと、サロンで思い入れのある『おてもやん』踊りをお教えることにしました」と話します。振り付けは、誰もが無理なく踊れるようにアレンジしたそうです。「皆さんに喜んでいただけて、それが何よりうれしくて」と清水さんは優しい笑顔を見せました。

## 仏像に込められた 思い

福田郵便局近くに工房を構える、矢嶋正興さんを訪ねました。矢嶋さんの趣味は木彫りの仏像や置物の製作で、それもかなりの腕前と聞きます。

そもそも、矢嶋さんが仏像に関わりを持ったのは32年ほど前のこと。終戦から50年目の折、町の戦没者遺族会で仏像建立の要望が上がりました。会の意見をまとめた矢嶋さんもまた、1歳の頃に父親を戦争でなくしました。

製作を担うことになった矢嶋さんはそれからというもの、時間があれば京都まで赴き各寺を回り、仏像と宗派についての勉強を3年ほど重ねたそうです。さらに熊本市のカルチャーセンターの木工教室に

夫婦で仲良く出迎えてくれた矢嶋さんと妻の浅江さん



通い仏像彫りの技術を体得。材料となるイチヨウの大木を御船町の寺から譲り受けて、要望から5年近くをかけて仏像が完成しました。

開眼法要を終えた仏像に、遺族会のご婦人たちの願文が収められました。「人様のお世話にならずに天国にいけますように」、「安らかな最期を迎えられますように」といった願い事が多かったそうです。「それらの願文から、若くして夫を亡くし苦労を重ねた妻たちの、戦後からの長かった道のりがしみじみと伝わりました」と矢嶋さんは当時の人たちへ思いを馳せます。多くの願いを背負った仏像は今、末永くあがめられるようにと矢嶋家の仏壇に収められています。



工房で左之目神社の締め縄を作る矢嶋さんは、祖父の時代から神社の世話をしているそうです



戦没者遺族会のために矢嶋さんが手掛けた仏像。素晴らしい仕上がりに感動します

## 「旅する蝶」が飛来

畑中集落を歩いていると、以前、わがまち散歩でお邪魔した皆乗寺住職の栗津信也さんに再会。「今春、境内の駐車場にフジバカマの花を植えたところ、アサギマダラがやって来たんですよ」と栗津さんはうれしそうに話します。

アサギマダラは長い距離を上昇気流に乗って移動する大型のチョウ。日本列島を縦断し、台湾や東南アジアから飛来するものもあり、「旅する蝶」と呼ばれています。フジバカマの花の蜜を好むのは、蜜に敵から身を守るための物質が含まれているからだそうで、長い距離を飛来できる生態は未だ解明